

金田村の空襲

平塚市の「ふるさと歴史再発見事業」の活動を金田地区で受託し、地域の方々から様々な生活体験をお伺いしてきました。

私の手元に残されている体験談の整理に取り掛かっている折も折、連日、「ロシアのウクライナ」侵攻の報道が続けられています。テレビの画面には、爆撃にさいなまれている市民、国外への避難する市民、いたいけな子供たちの姿 等々。その深刻な様子が映し出され、戦争体験のある私は胸が痛くなります。「金田の記憶」を語ってくれた方々も心苦しく感じておられることと思います。

1945(昭和20)年7月16日(午後11時32分)～17日(午前1時12分)平塚市は、米軍の爆撃機B29 132機から焼夷弾爆撃を受け、壊滅状態になりました。爆撃は主に市街地に集中していましたが、農村地帯の金田地区にもおよびました。

当時の児童であった方々の体験を学年別に紹介します。記事は、座談会で、また、個人的にお伺いした内容で構成しています。

今は、事無く平和な金田地区での生活ですが、戦争中、金田に住む児童たちが、いかに過ごしたかの「生きてきた姿」を読み取ってください。

小学生時代に体験した戦争

体験談は、当時の1年生(座談会)、その他の学年からも個々に聴取し、纏め、記載いたしました。

記事は、項目別と当時の所属学年別にまとめています。学年は低<1・2年生>、中<3・4年生>、高<5、6年生>と三分区としています。

思い出ですので、はっきりとした思い出、思い違い、年度を越えた思い出もあるでしょうが、お聞きしたことを踏まえての記載です。

今では、皆さんが懐かしそうに当時を語ってくれました。

(1) 平塚大空襲

* <1・2年生>

自分の家の物置も、蔵もみな焼けた。腰の曲がったおばあちゃんがバケツで水をかけたが間に合わず、物置や蔵は焼け落ちた。母屋に天井を破って焼夷弾が落下したけれど、不発弾だったので家が焼けることはなかった。屋根に穴が開いていた。

防空壕に逃げる時、姉を探したが見当たらない、ひどく心配したが、チャッカリとよその防空壕に逃げ込んでいた。とにかく大変だった。爆撃を避け、竹藪にも逃げた。金田地区でも防空壕の入口に焼夷弾が落ち、亡くなった人がいた。

寺田縄にも焼夷弾が落ちた。屋根を突き抜けて、筆笥の前に落ちてきた。家の人がいしたが、燃えることなく、無事だった。不発弾だった。

湘南平を見たとき、花火のようだった。中学校の方に逃げ、田圃や、小川に逃げ込んだ。爆撃がおさまって戻ると、家は焼け落ち何もなかった。唯、呆然としていたことが思い出される。一年ぐらいたった後でも、焼夷弾は田を耕すと土の中から掘り出された。不発弾が出てきた。

長持は大分やられ、ひどく燃えた。蔵が焼け尽きる前にコメを道路に出したが、一部は焦げ、2～3日間、焦げ臭かった。

金目川の下流に向かって逃げたが、平塚の町は火の海のように真っ赤だった。もう生きられないと思った。全員死んでしまうと思った。戦後、埋まっていた大きな爆弾の破片を掘り出したこともある。

B29の機体は手が届きそうに感じた。真上に飛んできて、とにかくあんな大きな機体は初めて見た。空襲前のことは忘れてしまい、よく覚えていない。空襲がショックだったのかな。

役場が燃えてはいけないと見張っていたら、見ていた隣の人がやられてしまったと聞いたことがある。

* <3・4年生>

大空襲の時、学校の木製の旗竿が火の柱のように燃えあがっていた。昇降口の柱の外側はモルタルで固められていたが、中は木で出来ていた。旗竿と同じように高い火柱を挙げて燃えあがっていた。

夜中のことだったので、かすりの寝巻のまま「川端」辺りまで見に行った。下手をすると燃え移ってしまうことを心配した母親にこっぴどく叱られた。爆撃から逃れて、「いぼとり稲荷」近く迄敷布団を引っかぶって逃げ込んだ。稲荷の周りは水田だった。

翌朝は、ジャガイモをゆでたご飯、昨夜の焼夷弾の火薬の臭いが強く食べられるものではなかった。

焼夷弾は花火のでっかいようなものだった。爆撃が終わって畑に刺さったり、横に倒れていた。六角形の焼夷弾を見に行った。

大空襲で焼失したのは、長持から入野にかけての通りに面したところだった。常願寺、少林寺も焼けたが熊野神社、八坂神社は免れた。お宮さんは燃えていない。農業会の倉庫が燃え、庫内に積まれていたコメが中心部を残して焼けた。焼け残りのコメが配給になったが、いぶり臭かった。

金田への爆撃は、火薬傷の物資が小学校に移動していたといわれている。「火薬半紙」といわれ、巻紙になっていた。戦後、焼けトタンのバラックの職員室に置いてあった。修了証書などが印刷された。弱い紙ですぐに破ける。当時の修了証書は残っていない。

金田は農家ばかりなので、爆撃の対象にはならない。ポイントは小学校だったと思う。缶詰も保管されていた。

金田地区への爆撃は、「中原」の大縄橋付近に軍の工場があり、兵器を作っていたとの話があった。爆撃が終わり、水田や畑にも焼夷弾が突き刺さり、農作業ができないので引き抜いたこともある。

* <5・6年生>

金田村が爆撃を受け、自分の家は焼けてしまった。その日、金目川沿いの土手、秦野街道に逃げた。爆撃を受けた金田村はいたる所でよく燃えていた。土手から見えた学校

は屋根が燃え落ち、柱がいつまでも燃えくすぶっていた。炎に包まれた学校は見た目にはすごくきれいだったと記憶している。

落とされた焼夷弾はかなりの数にのぼり、B29から投下された焼夷弾のバンドが外れず、まとまったまま落下したこともある。落下地点にはでっかい穴が開いていた。牛も焼け死んだと聞いた。被害は拡大し、亡くなった方々もいた。屋敷の隅に簡単な防空壕ができていて、逃げ込んだ。

小学校に軍事用の食糧などの缶詰が保管されていた。缶詰を見ることはできなかったが一部の教室に置かれていたという。金田地区の爆撃目標だったといわれていた。

金田が焼夷弾の爆撃を受けた時、まず、高い所から照明弾が吊り下がりながら、ゆっくり、辺りを照らしながら落ちる。とても明るく昼間のようなようだった。続いて、大きいB29が焼夷弾をバラバラと落とした。我が家では、子どもは逃げた。

東京で空襲を体験した叔父が、すぐに茅葺屋根に登り、大人たちはバケツで水を上げ、ぬらした藎で火をたたき消す。屋根に刺さった焼夷弾を引き抜いたりして家を守った。幸いにも屋敷に落下した焼夷弾の数は少なかった。家の周辺の水田には沢山落ちた。近くで牛が焼け死に、いつまでも臭かった。農業会も焼け、おコメが長い間くすぶっていた。

水神橋への途中、天王道に掘られた防空壕に逃げたが、高麗山には花火が上がったように火花が散っていた。

焼夷弾が落とされ竹藪や家々に燃え広がり、火災風と云うか強い風に巻き上げられた炎に金田村は焼かれた。炎の明かりに敵のB29が照らされ、機影がはっきり分かった。恐怖だった。

爆撃の時、家や物置がやられる心配から、保管されていたコメ3俵をリヤカーに積み、家族の者とまだ植わっていたイモ畑の畝を乗り越え、ガタガタさせながら運んだ。

焼夷弾は落下すると辺りかまわず突き刺さり、火を噴いた。それが付近を焼き尽くす。爆撃は見事に金田村の中心道路沿いだった。爆撃されたのは、金田村国民学校に日本軍の缶詰や砲弾が貯蔵されていたから、という噂が広まった。

千畳敷の高射砲は空に向けられていて、低空で攻撃してくる戦闘機には効果なかった

* <卒業生>

何も残らず破壊され、追分から平塚駅や須賀の港が見渡せた。焼夷弾が落とされた時は、辺りが明るくなり新聞が読めるくらいだった。

焼夷弾は落ちて、落ちて、まあ大変だった。恐ろしかった。ひどいものだった。

(2) 空襲・機銃掃射

* <1・2年生>

金田のまちは田圃ばかりで農道が走っていた。戦闘機から機関銃が打たれた時は、水路に逃げ込んだ。機関銃の玉がドドッと音を立てて農道を打ち進んだことがある。日頃から川に逃げ込めと云われていた。

長瀬の土手から逃げた時、機銃の玉が、土手にいた牛に当り、ドンと音を立てて倒れた。

機銃掃射は実に怖かった。

湘南平に高射砲が据えられていた。地元の人達は、あれでは撃ち落せないと期待していなかったようだ。

空襲警報が鳴ると授業は中止、急いで家に帰った。

当時は小学校一年生だったので、あまりよく覚えていないが、逃げまわっていた。

* <3・4年生>

空襲警報がなり、熊野神社の教室から寺田縄の男子5人がまとまって、家に帰った。防空頭巾をかぶり、辺りは田圃だらけだったので、戦闘機が来たとき、皆で土管の中に逃げ込んだ。

熊野神社で勉強中、空襲警報が鳴ると、先生から「すぐ帰れ」の指示が出た。寺田縄の子どもが集団で帰宅途中、昔のミニゴルフ場辺りは家がなく、一面の田圃、艦載機の機関銃でバラバラと撃たれ、防空頭巾をかぶって用水路に逃げ込む、土管に入り込む。

あれは大変だった。千畳敷、城所、八幡山に機関砲が据えられていたので、低空で飛行するには、撃ち落とされないように慎重に飛んだと思う。

艦載機は空襲警報と同時に飛来し、機銃掃射を受けたことがある。急降下してバリバリと撃つ。学校からの帰りには、田圃の溝に体を伏せて、通り過ぎるのを待った。田や畑で農作業の最中に機銃掃射を受けたこともある。怪我をした人もいたし、怖かった。

入野の八坂神社の桜並木の下に防空壕が掘られ、日本兵がいた。いざという時に出動するようだった。

出征兵士の見送りは、なぜか豊田の方から送り出した。秦野街道の長瀬の方ではなかった。旗か幟をもって出かけた。兵士から橋のところで挨拶があったことを覚えている。

* <5・6年生>

艦載機の攻撃は、パイロットの顔が見えるくらい低空で襲ってきた。城所の砲台を目標として攻撃してきたといわれていた。機銃掃射もあり、入野から水神橋に抜ける天王道沿いに避難小屋があった。野良仕事の最中、攻撃から身を隠す簡単な小屋掛けだった。

金目川の水神橋で魚を取っていた時、P51の機銃掃射を受けた。川に銃弾の水しぶきが上がった。敵機は子供まで狙っていた。

空襲警報が発令されると、いつも持っていた防空頭巾をかぶり避難する。学校では机の下に潜り込んだこともあった。家では防空壕に逃げ込んだ。防空壕の中には湧いた水が溜まっていた。それでも仕方なく中に身を寄せた。

* <卒業生>

湘南平の方から敵機が一機、続いて二機、三機とピラミットのような形をした編隊が厚木の方へ飛んで行く。先頭の機影が見えると、次々と戦闘機が増えていく。頭上の空が黒くなるような大編隊が通過して行く。このような時にはランドセルを上にして、狭い排水路に逃げ込んだ。水があっても無くても身の安全が第一だった。

(3) 終戦・進駐軍

* <1・2年生>

横浜ゴムの門に兵隊が立っていた。大きな体でとても怖かった。

* <3・4年生>

終戦の時は、親類のところへ遊びに行っていた。ラジオはよく聞こえなかった。真空管四本のラジオでは。その時一番感じたのは、これで戦争は終わった。アメリカ軍の飛行機は攻めてこない。これで親父は帰ってくるなどの思いがつのった。家族皆同じ気持ちだった。子ども心に、父が帰ったら、剣を付けるベルトがほしかった。父の姿が格好良かった。

戦が終わったので親はボオットしたと思うが、3年生だった自分は特に感慨はなかったように思う。

進駐軍は、火薬廠の正門に歩哨が立っていたが、金田村には来ていない。秦野街道をジープが走っていた。

米兵が平塚に進駐したが、金田村の場合は特に変わりなく、これといった記憶もない。今の横浜ゴム正門の両側に警備としてMPが立っていた。顔を合わせることもなかった。

* <5・6年生>

進駐軍が、直接金田村に来たことはなかったと思う。県道にはジープが走っていたが。

平塚に来たことの思い出は特にない。金田村には影響がなかったと思う。火薬廠に兵士が来ていたことは聞いた。

< 以上 >